

# 熊本県宇城市小川町における町家「長谷川邸」の建築的特徴と保存に向けての方策に関する研究

鳴川伸広\* 磯田節子\*\*

## A Study on the Architectural Characteristics of MACHIYA at Ogawa-machi, Uki, Kumamoto and MACHIYA Conservation Circumstances in the Future

### — A Case Study on the HASEGAWA Silk Reeling Mill and the Residence —

Nobuhiro Narukawa\*, Setsuko Isoda\*\*

**Abstract** This study aims to clarify the architectural characteristics of MACHIYA which was built in the Meiji, Taisho and before the world war II period at Ogawa-machi. And also it aims to clarify the circumstances of existing three MACHIYA. The three typical MACHIYA at Ogawa-machi were selected and we made measuring, hearing survey of them. These MACHIYA have survived by many residents every possible effort. In this paper we detailed description about “HASEGAWA Silk Reeling Mill and Residence”. The result of this study is expected to give an instruction to preserve old traditional MACHIYA in the future.

**キーワード** : 長谷川製糸, 小川町, 町家, 保存, 歴史的町並

**Keywords** : Hsegawa silk reeling mill and residence, Ogawa-machi, Machiya, Conservation, Historical Town scape

### 1. 研究の枠組み

#### 1.1 研究の背景と目的

小川町は熊本の中央部に位置する人口は約13200人(宇城市HP平成22年)の小さな町である。小川町商店街は古くから地域経済の中心地の役割を担い、細川時代には薩摩街道の宿場町として栄えた町であり、多くの伝承や史跡、寺社仏閣が存在する。かつては当該商店街



図1 熊本県小川町

の近くに海岸線があり商人は砂川を使い天草等との交易が盛んであった。八代平野の干拓により徐々に海岸線が遠のき、これまでの薩摩街道から新たに国道3号が商店街を外れ、鉄道駅も商店街から遠くに建設されたこと等により小川町商店街の衰退が始まる。車社会に伴い大規模ショッピングモールが進出し店舗流出、空き家の増加等により、

商店街一帯の人通りは減少し、過去の繁栄を思わせる賑わいはない。

本研究は小川町に残る歴史的建築物の残存状況を調べ、長谷川邸、塩屋の歴史的建築物を実測調査した。紙面の関係上本稿では長谷川邸の建築的特徴を明らかにし、併せてこの町家や歴史的な町並を維持していく意義及びその方策について考察する。

#### 1.2 小川町に関する既往研究

平成25年度磯田研究室において小川商店街にある新麴屋について、実測調査や聞き取り調査が行われている<sup>(1)(2)</sup>。

\* 専攻科 生産システム工学専攻2年 (現在光進建設(株)勤務) 〒866-8501 熊本県八代市平山新町 2627

Advanced Course, Production Systems Engineering Course 2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, 866-8501, Japan

\*\* 建築社会デザイン工学科 特命客員教授 〒866-8501 熊本県八代市平山新町 2627

Dept. of Architecture and Civil Engineering, 2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, 866-8501, Japan

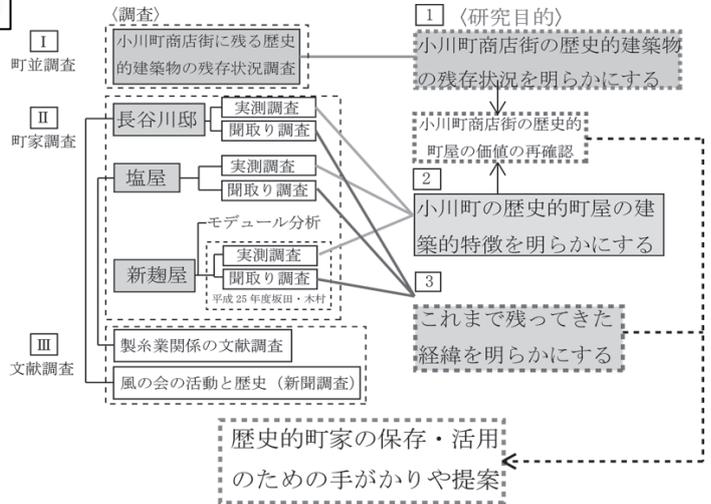


図2 研究の方法の流れ

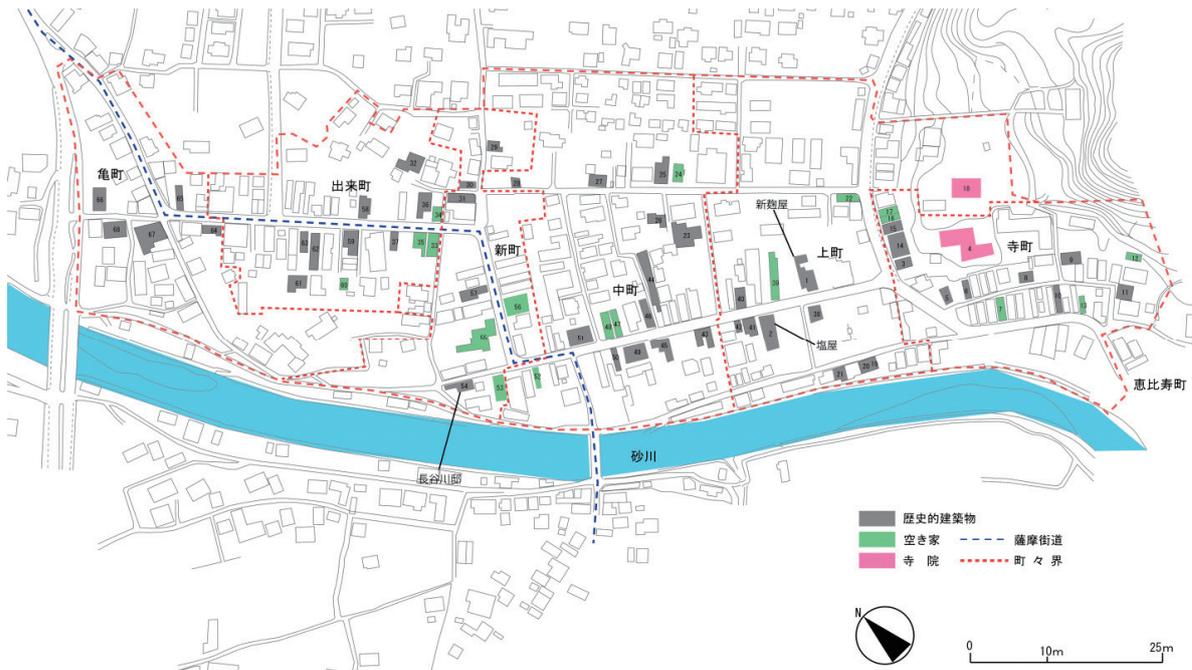


図3 小川町商店街における歴史的建築

1.3 研究の方法

研究の方法の流れを図2に示す。既往研究を参照し聞き取り調査、実測調査、文献調査によりおこなった。

2. 小川町商店街における歴史的建築物の残存状況

2.1 調査の目的と方法

調査の目的と方法を表1に示す。

2.2 調査結果

図3は小川町商店街における歴史的建築物昭和20年代以前、即ち伝統的な構法によると思われる建築の分布を示す。構造、屋根材、軒裏のつくり、壁材等の視点で昭和20年代以前に建てられたと思われる建築物を目視で判断した。今回対象にした地区内には357軒の住宅がありその中で歴史的建築物として判断した建物が68軒あり、対象地区内におよそ19%の割合で歴史的建築物があることが分かった。そのうち現在も住まわれているものが49軒、空き家もしくは持ち主はいるがこちらで生活していないものが17軒、寺院が2軒であった。住宅の中で約25%を空き家が占めており、4軒に1軒は空き家となっている問題が明らかになった。

表1 歴史的建築物残存状況調査概要

内容	
目的	小川町商店街について歴史的建築物（昭和20年代以前に建てられたと思われるもの）がどの程度残存するかを調査する。
判断方法	以下の視点により目視で判断 ①建物の構造、②屋根材、③軒裏のつくり、④壁材
調査対象範囲	熊本県小川町小川町商店街
調査日	2014年10月23日 13:00~18:00
	2014年10月29日 9:00~12:00
	2014年10月30日 9:00~13:00

表2 長谷川邸調査日と内容

調査日	調査時間	調査項目	調査方法	実施者
① 11月4日	13:00~17:00	聞き取り調査	現在ご存命の長谷川京子さんに製糸工場のお話を聞く	鳴川、磯田、磯田桂史
② 11月7日	10:00~16:00	スケッチ	実測を行うための準備として現在残っている建物の平面スケッチ	鳴川、磯田
③ 11月12日	10:00~13:00			
④ 11月17日	9:30~14:00			
⑤ 11月19日	9:00~13:00	実測	平面図を作成するための柱寸法、柱間寸法等をコンベックス等を用いて実測調査	鳴川、磯田
⑥ 11月24日	9:00~17:00			
⑦ 11月25日	9:00~14:00			
⑧ 11月26日	9:00~13:00	スケッチ 実測	現地調査Bの続きと断面図を作成するため断面スケッチとグラウンドラインからの高さを実測調査	鳴川、磯田
⑨ 12月1日	9:00~14:00			
⑩ 12月3日	9:00~17:00			
⑪ 1月7日	9:30~15:00			
⑫ 1月23日	9:30~16:00	聞き取り調査	聞き取り調査Aの確認、現地調査後の不明な点、これからのお考えについてのお話を聞く	鳴川、磯田

3. 長谷川邸の建築的特徴

3.1 調査方法

大正7年<sup>(3)</sup>に熊本県宇城市小川町に創業された長谷川製糸の工場は、国策により昭和60年初期に工場部分のほとんどが解体され、現在は工場主の住まいと一部元工場が残存している。表2は長谷川邸で行った聞き取り調査、実測調査の日程である。12日間合計59時間を要した。表3に長谷川家の概要を示す。今回の聞き取り調査は4代目当主夫人

表3 長谷川家の概要<sup>(3)(4)(5)</sup>

長谷川邸 所在地		熊本県宇城市小川町小川
初代	長谷川源次郎氏	当地で小間物屋などを経営
2代	藤市氏	T7 長谷川製糸創業
3代	慶喜氏	T14 会社を引き継ぐ
4代	慶一氏	S41 会社を引き継ぐ S59 長谷川製糸廃業 S60頃 工場の取り壊し
	京子氏	4代目慶一氏夫人 聞き取り調査をお願いした。

の長谷川京子さんにご協力  
いただいた。

### 3.2 我が国の製糸業と長谷川製糸について

#### (1) 我が国の製糸業について

蚕糸業は中国から始まり  
我が国への伝来は古く 199  
年<sup>(6)</sup>と言われている。

藩政時代に農家の副業と  
して養蚕が根付き、明治に

なり製糸業は国の基幹的産業となっていく。表4に1850年  
から1915年までの世界の主要生糸供給国の生産量を示す。

表4より日本は1906(明治36)年から1915(大正4)年ま  
で世界一の生産量(輸出量)を示す。この背景には1850年  
代からヨーロッパを襲った蚕病があり、清国や日本の生糸  
がイタリアやフランスに殺到する契機となった<sup>(7)</sup>。

我が国の主要輸出品の長期推移を図4に示す。明治から  
1930(昭和5)年頃まで生糸が我が国の輸出額トップのシ  
ェアを占めている。図5に我が国の生糸生産量と輸出量を  
しめす。昭和9(1934)年をピークとして、昭和15年頃か  
ら諸外国の経済封鎖により輸出が出来なくなり<sup>(8)</sup>第二次世  
界大戦を機に急激に衰退していく。図5に示すように生糸  
の生産量は戦前が圧倒的に多く、戦後一時期復興するが、  
生活の変化や化学繊維の開発による絹需要の低迷、日米経  
済摩擦による輸出制限、産業構造の変化等により昭和60年  
代初めに我が国の殆どの製糸工場は休業や廃業するに至  
る。製糸業は明治から昭和60年代初期までの約115年の間  
で我が国のトップ産業から廃業に至る激動の産業であつた  
ことがわかる。国内では表5によると西日本より東日本の  
製糸産業が盛んで、その中でも長野県が製糸所の数および  
製糸製額が圧倒的に多い。

表4 主要生糸供給国生産量<sup>(7)</sup>

年(平均)	フランス (生産量)	イタリア (生産量)	清国 (輸出量)	日本 (輸出量)
1850	3,180	5,000	1,241	—
1857	1,106	5,000	3,599	—
1863	650	3,508	2,736	777
1870	1,019	3,101	2,331	410
1871-75	658	3,171	3,941	691
1876-80	510	1,922	4,175	1,033
1881-85	631	2,766	3,342	1,360
1886-90	692	3,427	4,035	2,056
1891-95	747	3,686	5,403	3,006
1896-1900	650	4,865	6,529	3,459
1901-05	591	4,262	6,355	4,865
1906-10	583	5,654	7,191	7,448
1911-15	358	4,561	7,649	10,771

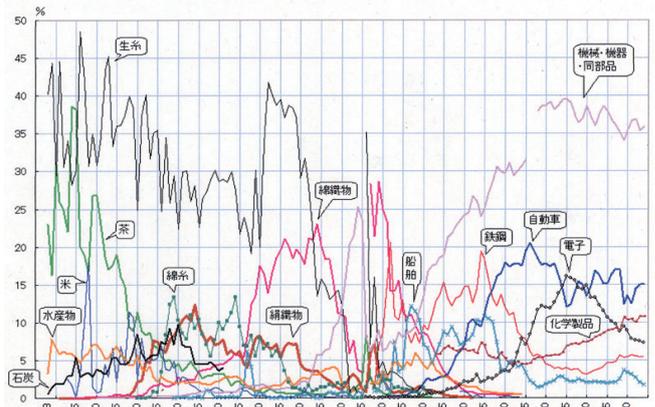


図4 我が国の主要輸出品の長期推移(1868~2014年)<sup>(10)</sup>

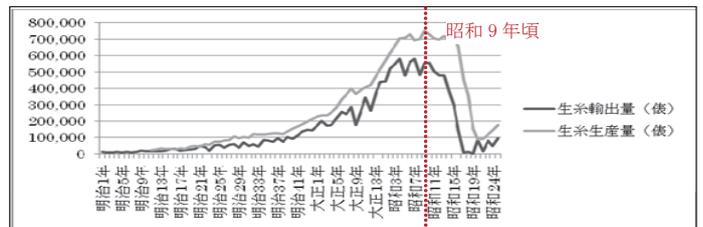


図5 我が国の製糸生産量と輸出量<sup>(11)</sup>

表6 大正14年現在熊本県製糸工場調べ<sup>(12)</sup>

製糸場名	所在地	釜数	創業年	備考(昭和30年現在)
1 熊本製糸株式会社	熊本市大江町	240	明治26年	
2 肥後製糸株式会社	熊本市内坪井	302	明治29年	現神戸製糸
3 肥後蚕糸組	熊本市内坪井	52	大正9年	昭和初期閉鎖
4 熊松製糸工場	熊本市春竹町	108	大正9年	昭和15年企業整備により閉鎖
5 高崎製糸場	熊本市島崎町	210	明治29年	昭和初期閉鎖
6 尾浜組熊本製糸場	飽託郡内坪村	420	大正6	現片倉熊本工場
7 不知火製糸場	宇土郡不知火村	100	大正10年	戦後復活
8 高瀬製糸場	玉名郡弥富村	120	明治45	閉鎖年不詳
9 肥後製糸玉名工場	玉名郡弥富村	156	明治44	閉鎖年不詳
10 肥後製糸木葉工場	玉名郡木葉村	100	明治41年	現熊本繊維織木葉工場
11 玉東製糸株式会社	玉名郡江田村	120	大正7	現城北製糸
12 肥後蚕糸組開製糸場	玉名郡伊倉町	64	明治31	閉鎖年不詳
13 山鹿製糸株式会社	鹿本郡大道村	100	明治41年	昭和15年企業整備により閉鎖
14 来民製糸場	鹿本郡来民町	80	大正6	昭和17年企業整備
15 鹿本製糸株式会社	鹿本郡山鹿町	124	大正3	
16 保証責任八幡製糸信用販	鹿本郡八幡村	120	大正7	閉鎖年不詳
17 保証責任製糸販売生産組	鹿本郡三岳村	60	大正8	閉鎖年不詳
18 保証責任鹿本中央製糸販	鹿本郡米田村	60	大正10年	閉鎖年不詳
19 植木製糸株式会社	鹿本郡桜井村	60	不詳	昭和15年企業整備により閉鎖
20 有限責任製糸販売購買生	菊池郡泗水村	231	明治43	現泗水社
21 菊池製糸場	菊池郡菊池村	120	明治41年	現磯紡菊池工場
22 保証責任菊池製糸信用販	菊池郡隈府町	100	大正7	閉鎖年不詳
23 肥後蚕糸組不知波製糸場	菊池郡隈府町	50	明治40	閉鎖年不詳
24 東肥製糸株式会社	菊池郡隈府町	50	大正10年	閉鎖年不詳
25 甲佐製糸株式会社	上益城郡甲佐町	80	大正7年	現酒六甲佐工場
26 杉田製糸場	上益城郡御船町	120	大正4	昭和9年閉鎖
27 肥後製糸益城工場	上益城郡木倉村	80	大正10年	閉鎖年不詳
28 島崎製糸木山工場	上益城郡広安村	100	大正10年	昭和15年企業整備により閉鎖
29 松岡製糸場	下益城郡杉上村	119	明治36	閉鎖年不詳
30 肥後製糸豊田工場	下益城郡豊田村	116	明治40	閉鎖年不詳
31 長谷川製糸場	下益城郡小川町	34	大正7年	現都島小川工場
32 隈庄製糸合名会社	下益城郡隈庄町	41	大正9年	閉鎖年不詳
33 吉野製糸合名会社	八代郡吉野村	160	明治38	閉鎖年不詳
34 球磨製糸株式会社	球磨郡大村	82	大正6	閉鎖年不詳
35 天草製糸株式会社	天草郡魚場村	208	大正8	閉鎖年不詳
合計釜数		4287		

表5 我が国の10人以上器械製糸所一覧<sup>(9)</sup>

府県名	製糸所	織	絹	力源		1カ年		職	工	1製糸所	職工1人	
				水力	汽力	手力	足力					製糸額
岩手	2	36	1	1		1,343	7	48	55	18	24.4	
秋田	2	60	2			3,253	26	164	190	30	17.1	
山形	11	274	7	1	3	8,268	56	381	437	25	18.9	
福島	10	472	3	7		20,856	55	329	384	47	54.3	
群馬	11	287	9	1	1	20,012	56	391	447	26	44.8	
栃木	1	96	1			7,200	25	150	175	96	41.1	
埼玉	3	71	3			5,607	16	107	123	24	45.6	
千葉	1	10	1			656	10	17	27	10	24.3	
東京	2	96	2			5,400	6	180	186	48	29.0	
神奈川	4	134	2	2		7,505	16	177	193	34	38.9	
新潟	1	72	1			3,037	15	85	100	72	30.4	
石川	6	468	5	1		10,752	28	553	581	78	18.5	
長野	358	8,072	339	16	3	125,911	962	8,391	9,353	23	13.5	
岐阜	143	3,216	109	2	32	31,714	334	3,261	3,595	22	8.8	
岐阜	80	2,613	50	30		64,320	294	1,826	2,120	33	30.3	
静岡	4	59	2	1	1	1,902	11	74	85	15	22.4	
愛知	6	112	4			962	14	117	131	19	7.3	
三重	2	48		2		675	22	75	97	24	7.0	
滋賀	2	116	2			4,187	12	132	144	58	29.1	
京都	1	12		1		531	2	14	16	12	33.2	
兵庫	2	72	2			458	9	72	81	36	5.7	
岡山	4	120			4	1,841	23	119	142	30	13.0	
高松	1	100	1			3,280	4	115	119	100	27.6	
福岡	2	36	2			500	2	55	57	18	8.8	
熊本	4	154	4			6,857	20	194	214	39	32.0	
鹿児島	1	12		1		312	2	31	33	12	9.5	
大分	2	38	2			783	2	26	28	19	28.0	
合計	666	16,856	552	4	64	464	338,129	2,029	17,084	19,113	25	17.7
近畿以西	21	708	13	3	5	19,424	98	833	931	34	20.9	

一方、熊本県は西日本の中で最も製糸製額や製糸所が多く西日本一の製糸産業の県であった。

(2)熊本県の製糸工場について

表6に大正14年現在の熊本県における製糸工場一覧を示す。35の製糸工場がある。その分布図を図6に示す。熊本市を中心に菊池、玉名、山鹿地域等県北部の分布が多く長谷川製糸が位地する県南地域は少ない。昭和4年には51、昭和13年26、昭和22年13、昭和52年10工場と推移している<sup>(13)</sup>。大正14年の熊本県の製糸業は熊本市の熊本製糸と肥後製糸が双璧をなしている。戦後は統廃合が進み13工場となる。そのうち全国展開する工場、片倉、神戸、鐘紡、郡是が4つを占める。

(3)長谷川製糸について

長谷川製糸の略年表を図7に示す。根拠は表中に示す。大正7(1918)年小川町で長谷川藤市氏により創業、昭和59(1984)年廃業までの66年間の歴史をもつ。先に示したように製糸業界は明治から第二次大戦前まで我が国輸出品目のトップシェアを占め、戦後は衰退し昭和60年初期までに全国の殆どの製糸工場は廃業する。閉鎖や統廃合が多くみられる製糸業界の中で長谷川製糸は規模は小さいが最後まで残った数少ない企業である。長谷川製糸の動きは表7に示すとおり大きく5期に分けることができる。第1期は創業と工場設備拡充期。この時期は我が国の製糸生産量が世界一の時期で最も活気があった時期である。繭は地元小川周辺をはじめ、下益城中央町の堅志田に支店をおいて集めた。八代や芦北からも購入したという。写真1は大八車等で長谷川製糸所へ繭が運ばれている風景で昭和初期頃と思われる。第2期は工場国有化、賃貸期である。戦時中下で輸出ができなくなり製糸業界の試練が始まる。全国の製糸所が国有化され、長谷川製糸も日本蚕糸製造株式会社に引き継がれその傘下となる。その引継書<sup>(14)</sup>から当時の長谷川製糸の従業員数約70人、その内男性は8人であり、殆どが女子従業員である。戦後は中小規模の工場では繭の確保等が困難であり、昭和21年に10年間の契約で大企業の郡是に賃貸される。長谷川製糸ではその間、別の場所で座繰による製糸を続け、太糸で織る博多帯の材料として生糸を出荷している。第3期は工場復元と自動製糸期である。昭和31年に郡是より工場一式が復元され長谷川製糸として操業が再開される。昭和36年自動製糸機械を導入、昭和47年に増設されている。昭和34年



写真1 長谷川製糸場へ繭を運び込んでいる様子(昭和初期頃、長谷川氏提供)



図6 大正14年熊本県における製糸工場の分布図(表6を基に分布図を作成)

年次	出来事	備考
明治5	官富岡製糸場創業開始	
明治16	母屋棟上 <sup>1)</sup> 長谷川藤市氏	■ 建築関連事項
明治35	長谷川慶喜氏誕生 <sup>5)</sup>	
明治40	貯糎第2倉庫、繭取扱場・住宅(社宅)、汽留場建設 <sup>2)</sup>	
大正7	長谷川製糸創業 <sup>4)</sup> (長谷川藤市氏)	
大正8	購買入作業場、事務所・繭取扱所建設 <sup>2)</sup>	
大正9	生糸価格の急騰と大暴落で利益を上げる <sup>5)</sup> 。格子戸を設ける <sup>6)</sup> 。	
大正11	■ 繭取扱場建設 <sup>2)</sup>	
大正14	慶喜氏社長となる <sup>3)</sup>	
大正15	慶喜氏結婚 <sup>2)</sup>	
昭和2	慶一氏誕生 <sup>6)</sup>	
昭和2頃	■ 仏間の前の庭をつくる	
昭和2頃	■ 1階座敷の床を現在の廊下に改築、2階ベランダもこの時期と思われる。 <sup>6)</sup>	
昭和4	■ 貯糎第一倉庫建設 <sup>2)</sup>	
昭和5	■ 浴場、社宅建設 <sup>2)</sup>	
昭和6	■ 乾場、貯水タンク(煙瓦造)建設 <sup>2)</sup>	
昭和6	下益城郡小川町西北小川字豊ノ内559を借地 <sup>2)</sup>	
昭和8	乾繰機(田端式四二尺)長六八尺購入 <sup>3)</sup>	
昭和9	自動給糎機購入 <sup>3)</sup>	
昭和11	■ 揚返場、煮糎場、工務室、繰糸工場、食堂建設 <sup>2)</sup>	
昭和14	■ 煙突(煙瓦造)建設 <sup>2)</sup>	
昭和15頃	■ 貯水槽(RC)建設 <sup>2)</sup>	
昭和16	資金統制令	
昭和18	「合資会社長谷川製糸場引継調書」作成 <sup>2)</sup>	
昭和18	乾繰受渡(日本蚕糸製造株式会社へ)385貫 <sup>2)</sup>	
昭和18	11月1日 工場一式が日本蚕糸製造株式会社へ引き継がれる <sup>2)</sup>	
昭和21	郡是工業株式会社への引継(昭和21年～昭和30年まで賃貸) <sup>3)</sup>	
昭和21	引継時の従業員数人事部18名労務部97名(内女子90名) <sup>2)</sup>	
昭和24	慶一氏東京繊維専門学校製糸科卒業(現東京農工大学) <sup>3)</sup>	
昭和26	慶一氏小川へ帰ってこられる <sup>8)</sup>	
昭和27	京子さん長谷川へ嫁いでこられる <sup>3)</sup>	
昭和31	郡是から工場一式復元 <sup>2)</sup>	
昭和34、35頃	■ 最盛期、24時間操業 <sup>6)</sup>	
昭和36	自動製糸機械を導入 <sup>3)</sup>	
昭和38	京子さんセカンドビジネス(着物の販売、郡是特約店)の商売を始める。母屋の2階を店舗として使う。 <sup>6)</sup>	
昭和41	慶一氏会社を引き継ぐ。	
昭和40年代	熊本市上通り蚕糸会館8社 <sup>1)</sup> で出資して建てる <sup>6)</sup>	
昭和40年代	■ この頃から10年程かけて母屋の窓木枠をアルミサッシに代えていく。 <sup>6)</sup>	
昭和43～	この頃から養母看病33年間 <sup>6)</sup>	
昭和45	■ 浴場と仏間を繋ぎ、養母の介護のための現状のように改築 <sup>6)</sup>	
昭和47頃	自動製糸機械を増設 <sup>3)</sup>	
昭和47頃	水香 <sup>6)</sup> ■ 道路がかさ上げされたため、道路側の軒を軒一つ分上げる。6) ■ 軒先を5寸切る。6)かつては天窓があったが、この時に無くす。玄間の改築もこの時と思われる。	
昭和50頃	■ 土間の一部を食事室に、台所の増築 <sup>6)</sup>	
昭和53頃	熊日「聞き書き相場一代」連載文中に「現在も熊本県は西日本一の養蠶県」とある。 <sup>2)</sup>	
昭和54	小川町役場火災、長谷川製糸関連資料等も燃える <sup>6)</sup>	
昭和56	先代慶喜氏亡くなる <sup>3)</sup>	
昭和56	中小企業事業団融資による繰糸設備の共同廃業事業に関する意向調査の実施(当時長谷川製糸は休業中) <sup>2)</sup>	
昭和56	工場休業する。従業員全員解雇する <sup>3)</sup>	
昭和59	製糸業免許を農林水産省へ返還。製糸業を廃業。法人格は残す。 <sup>3)</sup>	
昭和60年代初め	■ 工場の取壊し <sup>3)</sup> 、旧繭扱所や購買所の1階の鉄骨による補強を行う <sup>6)</sup> 。	
平成元年～平成15年頃	夫(慶一氏)の看病 <sup>6)</sup>	
平成12年	養母お亡くなりになる <sup>6)</sup>	
平成13年	慶一氏お亡くなりになる <sup>6)</sup>	
平成15年頃	■ 母屋の屋根を替える <sup>6)</sup>	
平成15年頃	■ 出典	
平成15年頃	1) 棟礼 2) 合資会社長谷川製糸場引継調書、昭和18年10月31日 3) 慶一氏メモ 4) 熊本県蚕糸業史 5) 熊日「聞き書き相場一代」 6) 京子氏より聞き取り	
平成15年頃	<熊本地元企業> 池水製糸、不知火製糸、長谷川製糸、長野製糸 <出先企業> 片倉、鐘紡、郡是、神戸	

図7 長谷川製糸略年表

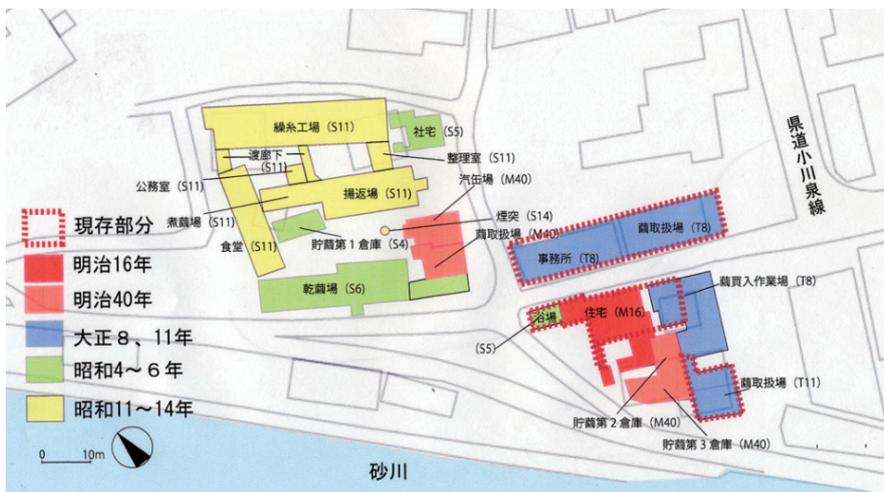


図8 長谷川製糸場工場配置図(昭和18年頃)

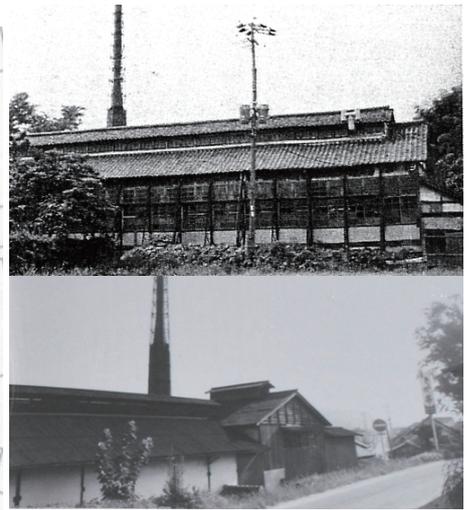


写真2 上：繰糸工場<sup>(15)</sup>  
下：乾繭場(長谷川氏提供)

頃から2交替24時間のフル操業になる。第4期は工場廃業期である。昭和40年代後半頃から製糸業をはじめ繊維業界全体が構造的不況に陥り、昭和50年頃から国の救済策の一つとして設備共同廃棄事業が始まる。長谷川製糸もその事業を受けて昭和56年休業、従業員全員を解雇、昭和59年廃業、昭和60年始めに住宅部分と住宅の前にある工場の一部を残して工場が取り壊される。第5期は現在の状況であり、慶一氏の後を奥様の京子さんが引継ぎセカンドビジネスの着物の販売を続けながら商工会の理事などをされて地域貢献活動をされている。

(4) 長谷川製糸場の建築の推移について

工場等の配置を図8に示す。建築年代は工場主の住宅は棟札、それ以外は引き継書<sup>(14)</sup>による。工場と工場主住宅や従業員の宿舎は同じ敷地に立地している。最も古い建築は工場主の長谷川氏の住宅で棟札より明治16年である(写真3)。次いで明治40年の貯繭第2と第3倉庫、繭取扱場、汽缶場であり、住宅を中心に工場が立地している。大正8年に事務所、繭取扱場、大正11年に繭買入作業場、繭取扱場が建設される。長谷川製糸の創業が大正7年であり、創業時は住宅がある敷地を中心に工場が立地している。昭和6年、昭和11年に住宅の北側の敷地に工場が大規模に建設されている。乾繭場や揚返場、繰糸工場、食堂が整備され、それまでの座繰りを中心とする手仕事の製糸から多糸織機の導入などの機械化による大規模化がおこなわれたと思われる。昭和14年に煙突が建設されている。工場建築の増築は戦前までで、戦後は主として自動製糸機械の導入などによる近代化がおこなわれている。

3.3 長谷川邸の建築的特徴

(1) 現存する建物配置と建築年代について

建物配置を図9に示す。残存しているのは住宅部分と旧事務所及び繭取扱場、旧炊事場、旧繭取扱場のみである。住宅は明治16年に建てられており最も古い。旧事務所及び繭取扱場(大正8年)は現在駐車場倉庫として利用されてい

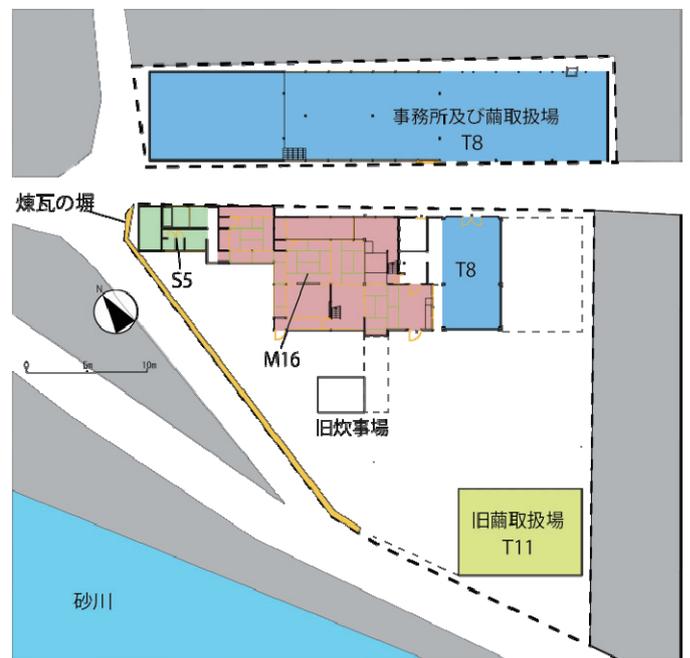


図9 長谷川邸配置図



写真3 長谷川邸住宅の棟札  
(明治十六年未と書かれている)

写真4 旧事務所  
(長谷川氏提供)

る。砂川側に煉瓦の塀がある。以前、貯繭第二倉庫があった所は庭になっており、以前の炊事場や赤レンガの繭取扱場(大正11年)の一部が残っている。

(2) 住宅について

a) 1階平面

1階平面図を図10に示す。玄関を入り広い土間があり田

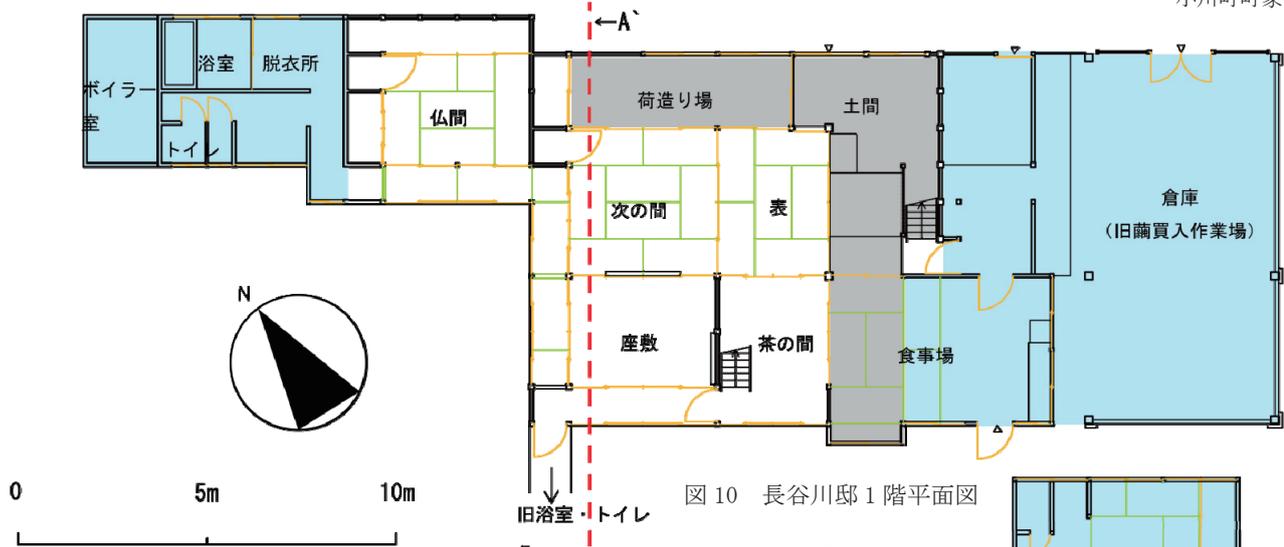


図 10 長谷川邸 1 階平面図

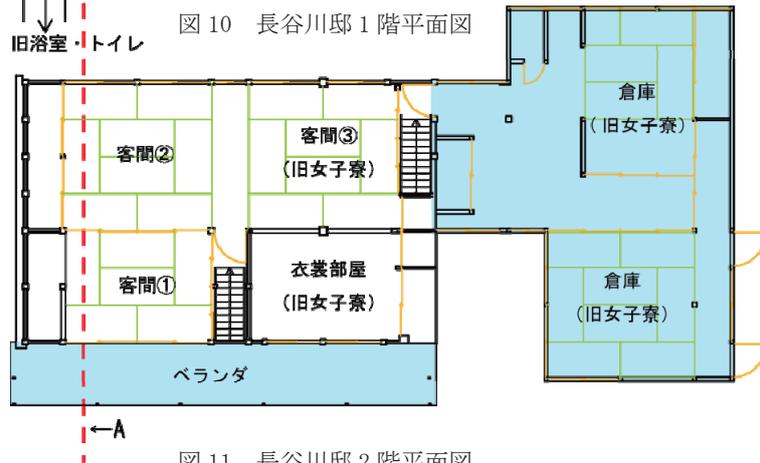


図 11 長谷川邸 2 階平面図

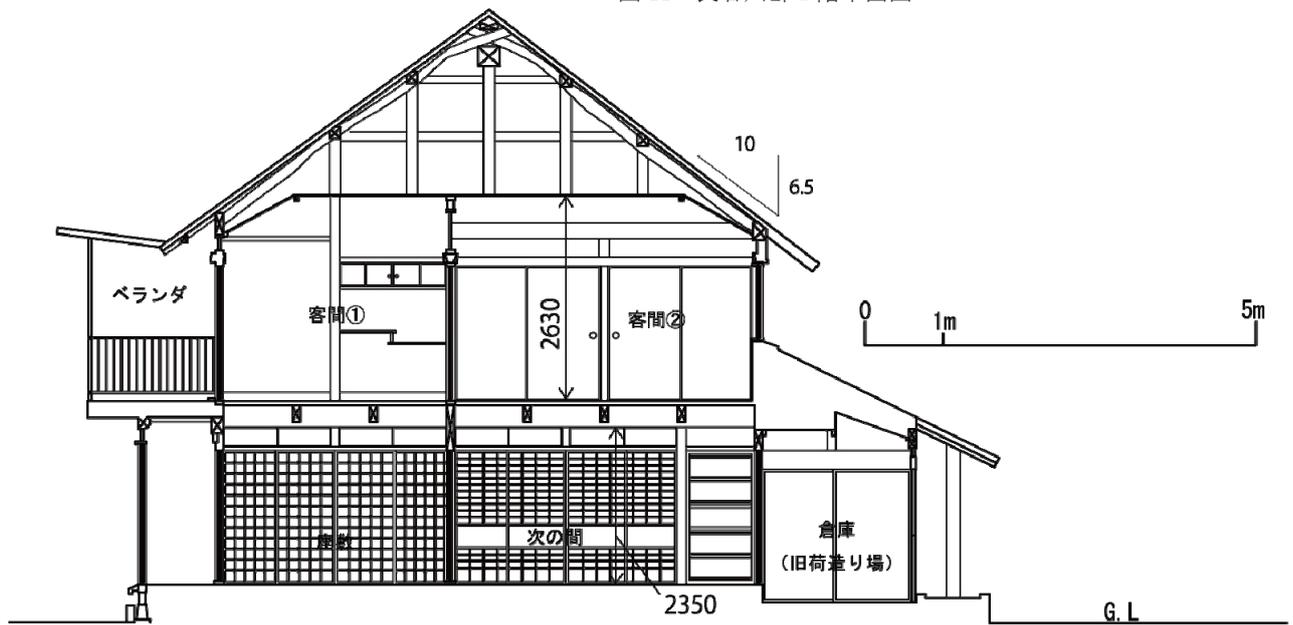


図 12 長谷川邸 A-A' 断面図

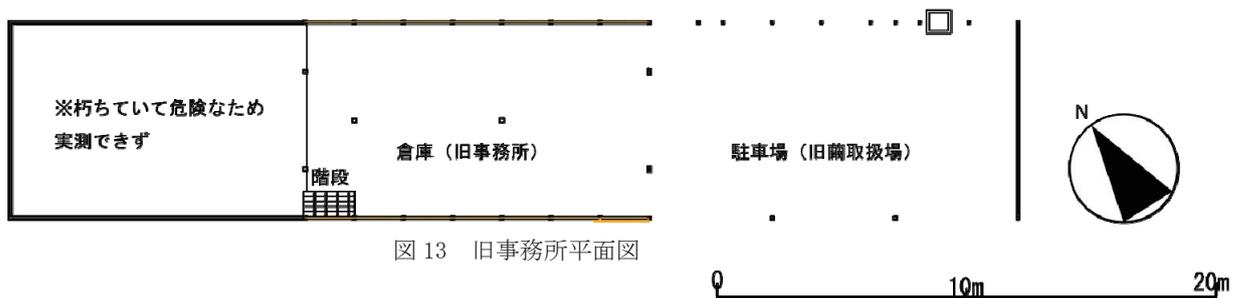


図 13 旧事務所平面図

の字に表(オモテ) (6 畳), 次の間 (8 畳), 茶の間 (6 畳), 座敷 (8 畳) が配置されている。また土間に隣接する倉庫は工場時代は土間が連続した荷造り場であった。浴室がある部分は昭和 5 年に建てられた従業員用浴室を改築し, 昭和 45 年仏間の押入れ部分を抜いて母屋に廊下でつながれている。座敷の床の間は当初は東側に設えられていたが, 建物が密集していて暗かったため西側に庭をつくり, 当初の床と壁を壊して廊下とし簡易的な床を西側に設けた。座敷の南に当初は浴室やトイレがあり, 渡り廊下で繋がれていたが, 現在は廊下部分だけが残っている。以前は図 10 の灰色で塗られている部分全てが土間で住宅部分を貫いていた。倉庫部分は繭買入作業場を解体したときに二階部分はそのままし, 鉄骨柱に変えて倉庫として使われている。

#### b) 2階平面

2階平面図を図 11 に示す。客間③と衣装部屋, 倉庫は郡是に賃貸していた時期に女子寮として使われていた。この時長谷川家の人が女子寮を通らずに2階の客間 (8 畳, 6 畳) に上がるために中央の階段が設けられたと思われる。玄関横の階段には, 上からの音が 1 階に漏れないように水平な戸が設けられている。ベランダは, 2階が女子寮として使われていた時に従業員が洗濯物を干せるように改築されたものである。以前は庭からベランダへ直接つながる螺旋階段があった。

#### c) 立面

写真 4 に示すように, 2階部分は土壁で漆喰で塗り込められた土蔵になっている。

#### d) 断面と小屋組み

断面図を図 12 に示す。2階建の母屋部分は間口 3 間半奥行 5 間半である。前面道路側に平屋で 1 間の土間が下屋で持ち出されている。庭側には半間の廊下があり現在は上部部はベランダになっている。創建時はこの廊下も下屋が架かっていたと思われる。屋根勾配は 6.5 寸である。

小屋組は地棟に合掌が 1 間間隔で投げ掛けられており蔵のような小屋組である (写真 6)。



写真 5 長谷川邸外観



写真 6 母屋の小屋組, 地棟と合掌(右), 棟持柱(左)

#### e) 意匠

写真 7 は 1 階座敷である。長押しはなくヒラモンと呼ばれる差鴨居が廻る。天井仕上げはなく梁が見える質素な仕上げである。次の間との間は葦戸があり, かつては夏期に襖から葦戸に入れ替えられていた。写真 8 は次の間で差鴨居がまわっている。工場時代はこの部屋に長火鉢がおかれご主人はここに座しておられたという。庭が良く見える。写真 9 は次の間の欄間で松葉のデザイン, 写真 10 は仏間の欄間で霞組である。比較的太い見附の棧で町家らしいデザインである。写真 11 は旧荷造り場にある藪戸である。写真 12 は次の間の押入れでブリキで内装されている。湿気防止のために繭の貯蔵庫に使われる仕上げという。仏間の押入れもブリキで内装されている。写真 13 は仏間前の廊下の欄間で型硝子が嵌められている。写真 14 は仏間前の軒で縁桁から彫刻された持ち送りが出桁を支えている。写真 15 は 2 階客間①である。天井が貼られこの町家の中で最も格式が高い部屋である。現在はベランダになっているが, かつては書院があったのではと思われる。違い棚, 天袋や狛潜りと座敷飾りが整っている。小屋組の合掌を隠すために窓側の天井が斜めに貼られているが, 意匠的に面白いデザインになっている。竿縁は黒で着色されており, これは小川町の町家で共通してみられる。客間②の間には写真 17 の透かし彫りの欄間がある。松と富士山がデザインされている。下部に透かし彫りが設えられた葦戸が美しい (写真 16)。

#### f) 住宅の基準モジュール

実測の結果, 長谷川邸は内々モジュールの場合およそ 6.3 尺, 心々モジュールの場合およそ 6.5 尺であり, 全体のモジュール算定結果も誤差は小さいためどちらの可能性もあるといえる。

#### (3) 旧事務所及び繭取扱場について

旧事務所及び繭取扱場の平面図を図 13 に示す。全長およそ 30m (15.5 間) と非常に長い建物で工場時代に事務所と繭取扱場として使われていた。小屋組は, 事務所部分はトラス構造, 旧繭取扱場部分は和小屋である (写真 18)。現在繭取扱場のほうは倉庫と駐車場として使われ, 旧事務所部分は老朽化がひどく実測が出来なかった。

#### 3.4 長谷川邸建築的特徴のまとめ

建築的な特徴は 2 階を土蔵とする居蔵造りで田の字型平面

である。小川町の県道拡幅工事で多くの町家が軒切りされたが長谷川邸は軒切りはなく創建当時の姿が残る。全体的に町家らしい質素な造りで1階は全てに差鴨居が廻って頑丈な造りである。押入はブリキで内装されており湿気防止用の繭貯蔵庫のディテールが住まいに応用されている。



写真7 1階座敷の欄間



写真8 1階次の間



写真9 1階次の間の葺戸



写真10 1階仏間の欄間



写真11 1階旧荷造り場の葺戸



写真12 1階次の間押入のブリキの内装



写真13 1階廊下欄間の型硝子



写真14 1階仏間前軒裏持ち送り



写真15 2階客間①の座敷飾り



写真16 2階客間葺戸



写真17 2階客間①の欄間松（左）と富士山（右）

#### 4. 保存に向けての考察

製糸業は明治から昭和戦前まで我が国第一の基幹産業であったが戦後は構造不況業種となり昭和60年初めに国策として工場が取り壊された激動の産業であった。閉鎖や統合が多い熊本県下の製糸業界の中で当該工場は最後まで残った数少ない製糸場である。4代目夫人京子さんは戦前から戦後を経て今日に至るまで激動の時代を過ごした“場”として思い入れが深い。京子さんが存命の間は壊すことはない、とのことである。数年前から熊本県庁の町家ファンの方々が雛祭りの時期に雛人形飾りを手伝ったり、年末には障子の貼り替えなどを手伝ってられる（写真19）。きっかけは小川町を散策している時に、長谷川邸を見て「見せてください」とお願いした事がきっかけとのこと。以来交流が続いている。このような日々のちょっとした交流が町家保存にとって重要な要素の一つと思われる。



写真18 旧事務所及び繭取扱所



写真19 県庁町家ファンの方が障子貼りを手伝う

（平成27年9月25日受付）

（平成27年11月25日受理）

#### 参考文献

- (1) 坂田純一他，新麴屋の平面と建築年代について-熊本県宇城市小川町商店街の近代化遺産に関する研究(その1)-，日本建築学会九州支部研究報告書第53号，pp.505-508，2014年3月
- (2) 木村圭佑他，新麴屋の建築推移と構造，意匠について-熊本県宇城市小川町商店街の近代化遺産に関する研究(その2)-，同上pp.509-512，2014年3月
- (3) 社団法人熊本県蚕糸振興協会，熊本県蚕糸業史，p.207，昭和55年
- (4) 長谷川慶喜，聞き書き相場一代，熊日新聞，昭和53年6月24日
- (5) 長谷川慶一氏メモ，工場を休止する昭和56年以降昭和59年から60年初期にかけて書かれたと思われる。
- (6) 平沢清人他，下伊那蚕糸業発達史，甲陽書房，p.1，昭和27年
- (7) 石井寛治，日本蚕糸業史分析，東京大学出版会，p.23，1972
- (8) 長谷川慶喜，聞き書き相場一代，熊日新聞，昭和53年6月27日
- (9) 石井寛治，前掲，p.128，1972
- (10) 社会実情データ図録4750 (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)
- (11) 農林水産省農蚕園芸局編集『蚕糸業要覧』昭和57年版，平成2年版
- (12) 社団法人熊本県蚕糸振興協会，熊本県蚕糸業史，pp.205-207，昭和55年
- (13) 社団法人熊本県蚕糸振興協会，熊本県蚕糸業史，p.313，p.479，p.484，昭和55年
- (14) 合資会社長谷川製糸引継調書，昭和18年10月31日，日本蚕糸製造株に引継ぐために書かれたもので，当時の工場の財産一式，従業員数等の記載がある。
- (15) 小川町史編纂委員会，小川町史，昭和54年